

一葉全集

第三卷

一葉全集

第三卷

筑摩書房版

一葉全集

第三卷



昭和二十八年八月十日 初版發行
昭和三十一年九月二十日 五版發行

定價 四百八拾圓

編纂者

塩田良平
和田芳惠

發行者

古田晁

印刷者

中内佐光

東京都千代田區飯田町一ノ二三

發行所

株式會社 筑摩書房

東京都千代田區神田小川町二ノ八
電話(29)七六五一(代表)——四
振替 東京 一六五七六八

本製島矢・印刷株式會社印刷

日記上

身のふる衣 まきのいち（明治二十年一月—八月）

三

若葉かげ（明治二十四年四月—六月）

一〇

わか艸（明治二十四年七月—八月）

三三

筆すさび一（明治二十四年六月—九月）

四六

蓬生日記一（明治二十四年九月—十一月）

七八

よもぎふ日記二（明治二十四年十一月）

一二三

森のした艸一（明治二十四年十一月）

一二七

につ記一（明治二十五年一月—二月）

一二五

につ記二（明治二十五年二月—三月）

一四三

日記（明治二十五年三月—四月）

一五七

につ記（明治二十五年四月—五月）

一七四

日記しのぶぐさ（明治二十五年六月）

一八九

しのぶぐさ（明治二十五年六月—八月）

二〇三

しのぶぐさ（明治二十五年八月—九月）

二二八

隨感錄一（明治二十五年八月）

二三四

塵塚の一（明治二十五年九月）

二三四

につ記（明治二十五年九月—十月）

二三九

道しばのつゆ（明治二十五年十一月—十二月）

二四八

よもぎふにつ記（明治二十五年十二月—明治二十六年二月）

二五七

よもぎふ日記（明治二十六年二月—三月）

二七八

よもぎふにつ記（明治二十六年三月—四月）

二九五

蓬生日記（明治二十六年四月—五月）

三〇九

しのぶぐさ（明治二十六年四月）

三一九

やたらづけ（明治二十六年四月）

三二六

蓬生日記（明治二十六年五月）

三三五

につ記（明治二十六年五月—六月）

三四〇

日記（明治二十六年六月）

三五五

につ記（明治二十六年七月）

三六二

解説

三七四

日記上

身のふる衣 まきのいち

みどり子の、む月し立て十日あまり五日といへるほどになん、稽古はじめとて師のもとにまかでけり。人々いまだきたらせ給はぬ程にこそ有けれ。やがて安彦ぬしきたらせたまひぬ。人々待えて、御題出し給ひて、夏子君、安彦ぬし、高點取給ひて、此日これにて皆々いとまたまはりてまかでぬ。

さし次に、廿二日のほど参りぬ。此日、宣雄ぬし來給ひぬ。ぬき歌して、おのれのなんえらび出させたまひぬ。題は二つにて事終りぬ。

廿九日の日参りぬ。此日、あらまし前の日に同じかりき。水の邊の柳てふ御だひにて、龍子の君高點取給ひ、いか成折にか有けん、おのれをもおしならばせたまひぬ。

きさらぎの五日参り侍りぬ。人々の御點いか成しかおぼえず、御題二つにてぞ有し。同じ十二

日、月の前の梅てふ御題にて、夏子の君、わらはおしならびて高點にて侍りぬ。人々のはいかがにや。御だひは二つにて有けり。

同じ十九日参りぬ。此日、發會の近付ぬとて、人々さゞめき合給ひぬ。いまだ其様しらぬ身には、いとゞあやぶまれて、人々の給ふをよそより聞侍れば、誰々は御振袖召給ひぬ。君は白糸りに御すそもやうこそよからめ。いなく、白がさねに御うらもやうこそよからめ。色は何にかし給ふ。ふじ色にくちば三つ重給はん。かうらひ色に、うす紅梅の下がさねこそ、に合給はめなど、取々いひはやし給をも、いとむねふさがりて、歌など考ふる様し侍りしに、君よ君よと、の給方有けり。誰なんめりとみてければ、園子の君にて有りぬ。いかで、君には何をかき給ふと、の給はするに、いとも、つたなきみにて侍れば、色よき衣もはえなからめ。常のにてこそと、口ごもりつゝ答へぬ。君、花色うらの衣き給はんには、みづからもこそと、のたまふに、いと、うれしくて涙こぼれぬ。やがて歌よみ出で、斗らずも高點取侍りて、やがてまかでけり。道すがらかんがへ侍れば、花色衣のうら付はよかめれど、人々もん付き給ひぬる中に、我一人異やうのなりして出ん事、あで人のみ給ふ前といひ、いと、はかなしと心になげきつゝ、やがて家居にかへり侍れば、親君連出給ひて様子いかにやとの給するに付て、汝にみ

する物有とて、ものとふで給ふ。目とめてみ侍れば、どん子の帶一筋、八丈のなへばみたる衣一重、いづこよりか置給ひぬ。いかで人々の召物はと、とひ給ふに、事しかくと申出侍れば、母君のの給はする様、いなく、さるあたりへかゝる衣していで給はんこそいと恥がましきわざにあらずや、よし給ね、と、涙うかめての給ふ。父君は、いかにとも汝がおもふまなるのものと、の給はすれど、口をしとおぼすけしきみえ侍りぬ。と様かふ様かんがふれば、家は貧に身はつたなし。しかりといへ共、頼めし人の義理もあり、思ひさだめて行にしかじと、かの衣のすそ引ほどきぬ。ひ直しなどし侍りて、その日をのみ待渡りつゝ、廿一日といへる日に、身はいさめども心にはいさまぬ色をおしつゝみ、とかく引つくるひつゝ午前十一時といへるほどになん、あたり近きおきなが車にうちのりて参りぬ。此月は、發會の事にて侍れば、九段の坂上なる萬龜ろうにて有けり。人々もはや來給ひて、こなたへとの給はするに、目とめてみてければ、げにや、善盡し美つくしたるきぬのもやう、おびの色かゞやく斗に引つくるひ給ふ。かの君はうすねづみ成縮緬の三ツもん付、うらはは定し通りになんし給ひぬ。いとどばづかしとはおもひ侍れど、此人々のあやにしきき給ひしよりは、わがふる衣こそ中々にたらちねの親の恵とそゞろうれしかりき。やがて人々諸共、坂下成鈴木てふしやしんしがりおも

むき侍りぬ。師は御車にてなん。龜子の君は、日頃洋服にて御くつめし給ひしから、御足痛むとて同じく車にて物し給ふ。綾小路八重子の君、田邊の龍子、片山てる子、あら井まさ子、小笠原つや子、とき子、なべ島家の君達おしならびて、坂下り給ふさま、むろにこめつる八重さくらをならべ出たる如くにて、往來の人々、あな、うつくしとめとめ給ひぬ。やがてうつし終り侍りて歸りぬれば、もはや、まろふど方参り給ひて、さぐり題ぞ出たり。ひるまへのほどは、おの／＼の多らびにまかせんとの給へば、おのがじとふで給ひて、あなにくや、雜題ぞ出たり。わらはは梅の御題ぞとらまほし、われは櫻、いな柳、と皆々多らび給て、最後にぞぞらばせたまふ。君は月か花かとの給ふに、いづれも／＼續出難くこそ覺へ侍れ。只探り取しをといひつつみ侍れば、朝雲雀てふ御題にてぞ有けり。人々はよみ給はぬも多かりけり。わらはは、さし次の點取侍りぬ。點取の御題には、月前の柳てふ也けり。おののき／＼よみ出しに、親君の祈りてやおはしけん、天つ神の恵みにや有けん、まろふど方は六十人餘りの内にて、第一の點惠ませ給ぬ。次は八重子の君、次は政成ぬしにてぞ有けり。龍子、てる子の君達、あなにくや、今参りに高點取られぬとつぶやきつゝ、せうちなどし給ふ。夏子の君は、君達清がきし給ふ折わらはのみ、のこし給ひしにあらざるやと、の給ふ。人々かへらせ給はぬ程に、暇ま

ふしてかへりぬ。

同じ廿六日参りぬ。此日、いかゞなりしかおぼへず。

彌生の五日のほど参りぬ。鈴木のうし來給ひて、さる方に年賀の侍れば、御歌たびてんやと、のたまひて歸りたまひぬ。師の給ふやう、いでや今日の點取題に出し侍らん、さし次の點までをこそとて、よませ給ひぬ。夏子の君、高點取給ひぬ。さし次の點みの子ぬし、わらは取る。かゝるのみにてはいとすくなしとて、あと二ツも入侍りし。

前月十六日の頃、空のどか成るよりつどひぬ。歌など三つふたつ終りて、師の君の、いでや夜の間風の覺束なきに、あたり近きうゑ物、みそのゝ櫻みはやさん、いかにぞと、の給へば、そは、いと、うれしからんかしなど、おのがじゝ言ひ合て立出侍りしが、常の道を行ば迂廻にて又興少なからん、此の寺一ツくぐり抜なばいと近けれど、道はいと惡しと覺えはべれど、やがて道むさぼりて趣ぬ。げにやいとく草は深く、石の塔など打みだれたる、いと哀也。そが後にめぐりてみれば、しの竹小笹など間なく生茂りて、道ふみ分ん方もなし。はるかにみ渡せば、四方の山の端、あいたいとして霞棚引、近き小山田には里のうなひの若菜つむに、いとど飽所なけれど、此難所こえがたくて人皆おはす。師の君いち早く道もとめて折給ふに、おのれ

もおくれじやと飛下りしに、あなめづら、一の谷のむかし思ふよと、どよみ給へり。何といふあたりにか有けん、小き川に丸木橋など打渡したる處からふじて渡り侍りぬ。なみ／＼の人ならんには、いとたやすき處なめれど、例の室の外さへ知給はぬ君達には道理ぞかし。やがて行侍れど、こゝにはさしてめづらしきこともなし。風流めきたることはなくて、この枝かの枝など折々給ふに、あな、けふとや、常ならぬみそのものを、まして男子ならぬ身のと、かたはらいたかりしが、いでやまかでん、こ度ぞいづれの方よりと、師の給ふに、いかにおはします、妾はひよどりごえをこそ好まほしけれなど、打ゑみつゝ言へば、人皆もそれ宜かめれと、いひ／＼して行に、しかなれにし物か、行迷ひもせざりし。道すがら、今日のゑものはいかになど聞へかはして歸りぬ。皆、かの枝ども情なふ折なしたるを取分てほこりかにの給ふを、一人引退きて見て有しに、君はいかにとの給へば、などかおろかなる身の手折らんには、花もさこそ口惜しかめれば控へ侍りぬ。されど、一人もれ侍らんも口惜ければ、かえでのめばへ一本岩のはざまに生侍れば、かくて有らば日の影をもしらでやはてんと、いとおしさに、是なん拔もて参り侍りぬ、賤が庭にうつし植て、みそのゝ名残とめて侍らんと、申出れば、師の君の、いとうと／＼敷枝ならねど、なべての花をみれば、いつもわらは心に成てなど聞へ給ふ。

おなじ廿三日の日参り侍りぬ。此日、落花道を埋むてふ御題にて、ふさ子の君よみ出給ふの、いとくめで度て有し。ひよどりごえ思はれ侍るとて高點成りき。餘りくめで度に

白雪の中を分行こゝち哉

ちりに散たる山櫻花

葉月二十五日に、歌合會の侍りしが、此日いとくめづらしきことにて、いつになく悪しき歌
おはさざりけり。御題は、故郷月にて、十四番の御組にて、判者伊東祐命の君。左の頭は加藤
安彦ぬし、右の頭、梅村宣雄ぬし。左には、みの子の君、まき子の君、廣子の君、とよ子の
君、力子の君、水野忠駒ぬしなり。右は夏子の君、のぶ子の君、たよ子の君、つや子の君、わ
らは成き。右の方、人々ふそく（以下缺く）

若葉かげ

花にあくがれ月にうかぶ折々のころをかしきもまれにはあり。おもふこといはざらむは腹ふくるゝてふたとへも侍れば、おのが心にうれしともかなしともおもひあまりたるをもらすになん。さるは、もとより世の人にみすべきものならねば、ふでに花なく文に艶なし。たゞその折をおのづからなるから、あるは、あながちに、ひとりぼめして今更におもなきもあり。無下にいやしうて、ものわらひなるも多かり。名のみことくしう若葉かげなどいふものから、行末しげれの祝ひ心には侍らずかし。

卯のはなのうきよの中のうれたさに

おのれ若葉のかげにこそすめ

卯月十一日。吉田かとり子ぬしの澄田川の家にて、花見の宴に招かるゝ日也。友なる人々は、師の

君のがりつどひて、共に行給ふもおはしき。おのれは、妹のたれこめのみ居て、春の風にもあたらぬがうれたければ、いでやともになどそゝのかして誘ひ出ぬ。花ぐもりとかいふらんやうに、少し空打霞みて、日のかげのけざやかならぬもいとよし。上野の岡はさかり過ぬとか聞つれど、花は盛りに月はくまなきをのみ愛るものかは。いでやその散がたの木かげこそをかしからめといへば、ならびが岡の法師のまねびにやと、いもうとなる人は打急みぬ。さすがに面なくて得いはず成ぬる事もをかし。我すむ家より上野の岡は遠きほどにてもなかりければ、まだ朝露のしげきほどに來にけり。聞けんやうにもあらず、清水の御堂の邊りこそ大方うつろひたれど、權現の御社の右手の方など、若木ながらまださかり也き。さと吹く朝風のひやゝかなるに、ぬれたる花びらの吹雪と斗散みだるゝは、いとをしくて、おほふ斗の袖もがななどいはまほしけれど、例のと笑はれんがうしろめたくてやみぬ。澄田川にも心のいそげば、をしき木かげたちはなれて車坂下るほど、こゝは、父君の世にい給ひし頃花の折としなれば、いつもいづもおのれらともなひ給ひて、朝夕立ならし給ひし所よと、ゆくりなく妹のかたるをきけば、むかしの春もおもかげにうかぶ心地して、

山櫻ことしもにほふ花かげにちりてかへらぬ君をこそ思へ